
FINALFANTASY零式－1 0の名と4人のルシー

n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FINAL FANTASY零式－10の名と4人のルシー

【著者名】

ZZコード

N9465Z

【作者名】

n

【あらすじ】

Dr・アレシアを母と慕う特別な魔導院の候補生とは違つ幻のクラス0。

表舞台には出る事の無かつた0組の候補生達は朱雀の窮地を始めとし朱雀の切り札として動かしていくことになるそしてDr・アレシアの行う世界の螺旋600104973回目

Dr・アレシアは本来存在しない10を呼び出しクラス0に加えたそしてDr・アレシアはルシをも生み出す

世界を正しい方向、本来の今までの600104972回までは

違った世界にする為にフィニスの時では無く
12人が笑つて生きる世界を作り出す為に新たなクラスゼロのメン
バーとルシの4人を世界に加えて・・・

プロローグ（前書き）

ええっと…

「です！

失礼ながらFINALFANTASY零式のファンファイクションを
書かせていただきます！

他にも書かれている作者さんも多いとおもいますがその人以上に頑
張っていきますのでよろしくお願いします！

優しい魔王の疲れる日々もよろしくおねがいします！

プロローグ

「マザー・・・？」

背が高かい気弱そうな青年が眼鏡をかけた女性に名を呼びかける

「あら？ 起こしてしまったかしら？」

「私は結局考えてみたのよ・・・
これで最後の螺旋にしたいと私は思っているわ。
だから私は貴方を起こしたのよ」

「そつか・・・

僕はマザーの言つことなら何でも聞くよ・・・
やつと会いたかったみんなに会えるんだから・・・」

「そうね。

でも貴方はここでの記憶を少しだけカットさせて貰つわ、
今から貴方を朱雀に送るここにいる12人と一緒に、
それまで・・・おやすみなさい」

「マザー・・・おやすみなさい」

「ここで歴史をかえる・・・

長年生きてこるとすこしおらしくなるものね・・・」

――貴方は人の死を忘れられない――

――貴方は12とは少し違つ――

――貴方は繋げるの12人の生きる未来を――

――貴方には期待してるわ――

――10の名を持つ者――

プロローグ（後書き）

ファンファイクション！
初めてのファンファイクションです！
応援していただけたら嬉しいです！
優しい魔王の疲れる日々も頑張つて書いていきませぬでござりしほ
願いします！

開戦、運命の3時間 1（前書き）

ファンフィクション初めてとことこのことでしょとたくそかもしぬせんし再現しきれない所とかもあるかもしねませんが頑張つて書いていきますのでよろしくお願ひします！

「彼らは自らの運命を」

「自分たちで決めた」

「そう、死ぬことを恐れず」

「死に直面する恐怖を知らずに」

午前十時五十一分

血まみれの死体がそこらじゅうに広がっている
その道をふらつきながら歩く男がいた男はふらつきながらも前にただ前に歩いていた・・・

「ポイントは・・・まだ・・・先か・・・」

男はしばらく歩くと建物の影に隠れた同じような風貌の兵達を曲がり道で見つけた

「みんな、大丈夫か?」

ふらふらとその場に倒れる男、剣を降ろし男は隠れていた兵達に質問をする

「朱いマントの・・・若い兵を見なかつたか・・・？」

「見てない・・・」

隣に壁を背にし座つていた女の兵隊が彼の質問に答えた

「アンタは・・・？」

まだ立ちながらはなせる兵士に女の兵は見ていないかと質問した

「俺は・・・」

その時空から赤い炎の塊にような物が飛んできて彼らの真ん中で破裂した
あまりの風圧に吹き飛ばされる兵士達、男も持つていた剣と一緒に吹き飛んでしまう

「いたぞ！」

虎の様な面を被つた男が現れた

「殺せ」

男達は重火器を持っており

1人は女の兵の胸部辺りを深く重火器についていた刃でその女兵士を一刺しで殺す

もう1人は破裂した火の玉が当たりとても救える状態じゃない
男は立て膝に手をつき、その場から逃げだそうとした
それを2人の兵が見逃す訳もなく男の片足を撃ち男は倒れた

男も男で今度は相手を怯えきつた田で見つめながら後ずさりしていく
兵が男を攻撃しようとしたとき

鳥の鳴き声が響いた

「なんだ？」

男はそうこうとその男の脇腹を大きなヒョコの様な生物がタックル
した

ヒョコは1人を蹴散らすともう一人の兵に向かって鳴き声を発した
怯えた兵を見た男は落とした剣を手の平で探し掴み

「うわあー！」

声にならない様な叫びをあげながら兵士の胸に剣を突き刺したこれ
でもかと思わんばかりに

一刺し・・・血しぶきがあがり兵士は死んだ

男は敵兵に剣を刺したまま疲れ切った表情を見せそこで仰向けに倒
れ込んだ

そらは曇つていてなにが起こっているのか分からぬいつも晴れて
いる空は煙でまつたくみえなくなっていた。

するとヒョコの様な生物が男に近寄る

男はその生物の顎を撫でた

「チチリ・・・」

生物の名らしきものを呟く

しかしその生物の首から血がポタリと落ちた

生物の首には傷があり男はそれに気づくと立ち上がりフラフラしな
がらも生物の状態を確認する

「よし・・・まだだ・・・エースにこれを・・・」

男はそう呟くとチチリと呼ばれる生物に乗りその場を後にした

いつもは清楚かつ綺麗な街並が壊され、
廃墟にでも来たかの様な町並みになつてゐる。

黒煙がチチリに乗つた男を襲う、しばらく行つたところ門が見えた
近く・・・

「田が・・・」

そう言つて門を通りすぎた時、男はチチリから落下した。
顔を打ち血まみれになつた男に落してしまつた主人の元へチチリ
は寄つた

男はチチリが寄つてきた事に気づくとある事をふと思ひ出し口に出す
「あいつは・・・エースは・・・?」

燃えさかる火に囲まれながら男はまたそこに仰向けに倒れ込んだ

午前十一時三十七分

銃声が響きチチリの鳴き声上がつた

倒れ込むチチリその倒れ込んだ音に男は気づきハツとする

「チチリ・・・!」

男は倒れ込んでしまったチチリの近くに行き名を呼ぶ

「チチリ！」

男は左手から緑の氣の様なものをだし魔法でチチリの治療を試みる
が・・・
魔法はかからない

「くつそ・・・・」

男は後ろに居る兵に気づきながら人の名を呼んだ

「エース・・・・」

地面を殴りつける男に先ほどの兵と同じ格好をした三人の兵が近付
いてくる

「エース」

男達が最後の一歩となる全身をした時、

「エース――――――」

男は叫び声をあげた

すると彼の前から巨大な炎の塊が後ろの3人の兵を吹き飛ばした
男は目をこらしそこに居た人を見る
そこには・・・・

「ここだ！僕はここだ！」

少し長い金色の髪を靡かせ青い瞳をした少年が返事を返す男はその者を待っていた者と気づくとその場に倒れ込んだ激しく燃える背後の火を前に見て男はチチリに寄り添いチチリの羽ねを枕にしながら右手を振り上げ落とそうとする・・・

するとその手をエースと呼ばれた少年が両手で優しく掴んだ

「イザナ・・・」

少年はその男の傷の回復を試みるしかし・・・何らかの影響によつて治療は行えなかつた。

その少年の隣を門の向こうづ側から遅れて来た眼鏡をかけた少女が男をみながら

「もう、無理ですね」

と言いつきその場から離れた

「分かつてる・・・」

少年ももうこの男は助からないと見るとその場を立ち去り眼鏡をかけた少女の後を思い足取りで追つた
イザナはその少年お後ろ姿を見つめ

「き・・・来てくれて・・・

ありがとうな・・・

チチリ・・・少し・・・休もう・・・

男はチチリを撫でると笑みを浮かべ

「おまえの名前……やっぱり……変だよ
マキナの名付けは……わかんないな……」

男はそう言つとそこで倒れ込み目を閉じた

立ち去つた二人の前に先ほどの兵士が三人立ちふさがつた
するとその男達の前に鋭い眼光を敵に向け髪は針の様に尖つた感じ
のする少年が立ちはだかった
少年は手を肩から少し離れた所に置くと
槍がどこからか現れ少年の手に持たされた

「へッ……」

笑いながら敵兵士を見下し少し微笑む

少年は一人ずつ兵士をその槍で突き刺し1人、また1人と殺した

午前十一時三十九分

イザナはチチリにもたれながらチチリに呴いた

「俺もお前も……死ぬのかな……
マキナ……元気でな……
レム……もう一度……会いたいな……つ……」

チチリ・・・お前が一緒に良かつた・・・

男は少し叫きながら過去の事を振り返る・・・

その男を見つめる眼鏡の少女とエースその視線は温かいものではなかつた・・・

「イヤだ・・・！

怖い・・・イヤだ・・・死にたくない・・・！」

男は呻き声を上げながら泣き出すその瞳からは涙が零れていた
チチリも呻き声をあげる

それを見たエースはただただ・・・唇を噛むしかなかつた・・・

午前十一時四十一分

鋭い眼光の少年は兵士を片付け眼鏡の少女とエースと会流した

「行つてきなわ」・・・

眼鏡の少女がそういうとエースは死した兵士の場所へ向かつた
一步ずつ一步ずつ・・・死した兵士に近付くもう名は覚えていない・
・

この兵士とどんな関係だったのかももつ・・・記憶にはない・・・
エースは悲しみの表情を浮かべ倒れ込んだ黄色い鳥の目の先を撫でた
男の手を優しく手にとり男の胸のまえに手をやつた・・・

男は血まみれのまま・・・眠っている
エースの瞳からは一粒の涙が零れていた

同時刻 午前十一時四十一分

「また・・・一人・・・死んだか・・・
人が死んでいく・・・僕は・・・」

1人佇む銀髪の少年、

人々の死を悔やみ顔がひきつる・・・

同じ軍の仲間・・・

自分の国の人

敵兵を許さずにはいられなかつた

「「「テン！聞こえているか？」」

彼の胸ポケットに入つていた死した兵士から貰つた通信機から女性らしき声が鳴り響いた

「セブン・・・?
どうしたんつスか・・・?」

「「お前に任せた事になつてしまつてすまないな・・・
他に適任が居なくてな・・・」」

「全然いいですよ！？」

それじゃあ僕は作戦を開始するつス・・・！」

銀髪の少年は通信機を再び胸ポケットにしまつと武器ひしき大剣を
担ぎ、
戦場に向かつた

開戦、運命の3時間 1（後書き）

第一話イザナが死ぬ所を書いてみました！
2話は多分テンが活躍すると思います！
感想等もお願いするつスヽ・・・

開戦、運命の3時間 2（前書き）

死した兵士から通信機を貰い
朱いマントを身に纏つた候補生達
テンは敵の戦艦を叩きに行く

開戦、運命の3時間 2

鷗歴 842年 水の月12日

「ペリシティウム白虎」を有する「ミリテス皇国」は、隣国である「朱雀領ルブルム」への侵攻を開始する。

宣戦布告と同時に国境付近へ集結していた皇国軍はルブルム各地に進軍を開始。

同時刻、別動隊による「ペリシティウム朱雀」への奇襲を敢行。

その部隊にはルシが含まれていた。

ルシを用いた国土侵略行為。

これは、オリエンス四ヶ国が定めた「パクスコーデックス」に対する重大な規約違反であった。

「魔導アーマー」を主戦力とする皇国軍に対し、ペリシティウム朱雀は、魔法を以てこれに応戦。

その魔法によつて呼び出される「召喚獣」の圧倒的な力は、戦艦をも凌駕し、皇国軍の奇襲は失敗するかに見えた。

しかし、白虎ルシであるクンニ率いる特殊部隊が朱雀の攻撃をかいぐり、

新兵器「クリスタルジャマー」を発動。

「朱雀クリスタル」の完全な無効化に成功する。

魔力の源を絶たれた朱雀軍は、戦力の大半を失いなすすべもなく制圧されていった。

皇国元帥「シド・オールスタイン」は

朱雀174代院長「カリヤ・シバル6世」に対し、

朱雀全軍の武装解除および朱雀クリスタルの引き渡しを要求。

朱雀に与えられた猶予は6時間。

要求がのまれない場合、皇国軍の殲滅作戦による朱雀への肅清が行われる。

魔導院陥落の危機対し、カリヤ院長が下した決断は幻といわれた朱雀候補生「〇組」を中心とした魔導院解放作戦であった。

――― 魔法院前―――

朱雀領ルブルム代表するかであろう魔導院の前に銀髪の少年は居た。本来ならば候補生達が日々の物事を語り合つたり放課後の相談をしたりする筈の魔導院前、そこには皇国軍の兵により建物は倒壊され天然芝は燃やされ燃える火や油、鉄の異臭人の声など聞こえないものはやここは朱雀の魔法院の前ではないように思えた

「これが人のやる事か・・・?」

大剣を携えた銀髪の少年が1人その場に立ちつくしていた
少年の怒りはもう隠しきれぬ所まで燃え上がっていた
それはまるで火の燃えさかる如く・・・

「貴様は！朱雀の兵か！」

皇国兵を曰で認識する

1人しか居ない皇国兵は通信機を使い仲間を呼び寄せた

「さて・・・

どう殺してやるうかあ・・・」

舌をなめずりながら敵の皇国兵は銀髪の少年に銃を向けながら近付く
銀髪の少年は胸ポケットから先ほど通信のきたセブンに通信を送る

「「テン？どうかしたか？」」

「少し・・・時間がかかるかもしれないっス・・・
絶対戦艦は落とすっスから・・・信用してほしいっス・・・」

銀髪の少年は怒りをあらわにしないように交信を続ける

「「分かった。」

何があつたかは知らんがお前の言ひことを信じよう、
ただし予定時刻はすぎるなよ？」

「・・・わかつたっス・・・」

銀髪の少年はセブンとの交信を切ると曰の色をまるで話をしていた
温厚な人間とは思えない様な別人の様な目付きに変わるそれは圧倒

的にはち切れんばかりの憤怒からであった

「なつ・・・なんだよー

やれるもんならつ・・・！」

「黙れ・・・」

男が口を開き話し出した途端銀髪の少年は男の腹を片手で突き破った。

その場では血がはじけ飛び男は声も出せぬまま腹を突き破られ死んだ

「君らが何をしてたか教えてあげるよ・・・

さあ・・・こいよ・・・皇國の方々は偉いんだろう・・・?

人を殺すんだろう・・・?

クリスタルが欲しいんだろう・・・?

だつたら俺を殺して奪つてみせろよ・・・?

後・・・俺を怒らせたのはお前等だからな・・・?

覚悟はできてんだろうなあ・・・?

皇国の皆様がたあっ！

――朱雀の街――

「テンには苦労をかけてしまつな・・・」

テンとの交信を終えたセブンは自分の武器である鞭剣を手にしセブンは通信機を切る。

銀髪の綺麗な髪、目を見張るほどの顔の整い彼女は戦闘する者とは

思えない物腰だつた

「セブンー？通信終わつたー？」

赤髪のようだが少し桃色の様な髪色をした小柄な少女が交信の終わつたセブンに話しかけた

桃色髪の少女は小柄ながらも勇敢な少年の様な目をしている

「ああ、一応な・・・また後で連絡はするつもりだ。

テンは多分敵兵と交戦状態だろ？」「

交信しながら聞こえた足跡がいくらかあった。

少なくとも10人以上は居るそれに鋼機と呼ばれる皇国の兵器の稼動音も通信機越しに耳にした。

本当はテンを助けに行きたいのだがセブンには別の任務がありその場には向かえない

それに彼の志願で彼は戦艦を落とす作戦についたのだから誰も文句は言えない。

セブン以外の面々も一度は反対したしかしマザーがその任をテンに任せることを推し彼一人ペリシティウム白虎の戦艦を墜とすまたは消失、爆撤を任せた

「まあ・・・確かにテンじゃ心配かもね
ナインやキングならまだ頑張つて言えるけどさ」

桃色髪の少女がテンの事を気遣いながら天を見上げため息をつく、

「ケイト・・・

これはマザーが決めた事だ

私たちはマザーの命令だからな・・・

セブンも下に俯きテンの顔を頭に浮かべ心なしか落ち着いていない
心配そうな表情を浮かべるセブンにケイトは落ち着かせようとテン
の事について話し出す

「でもさあ?

私はテンだと違つことを心配してやうんだよなー・・・」

ケイトの証言に疑問を持ちつつ頭上に?を浮かべるセブン

「だつてさー

多分、私らの中だと普段はすつじい弱そうな奴だけど、
戦闘訓練とかになると田の色変わるよ?

ずっと前にやつたー・・・ええつと・・・

そつそう! ベヒーモス討伐の時!

デユースが怪我しちやつた時に

テンがブチギレちゃった時、威圧感だけで追い払つたじゃん
だから人間なんかじや逆に危ないんじやない?

テンは怒ると何するか分からぬしさ
ね! デユース

「テンさんは皆さんに優しいですから・・・

私たちにもだから・・・暴れすぎたら私がとめますつー」

もう一人休んでいたデユースと呼ばれる茶髪の髪が綺麗にまとめられた少女が立ち上がりテンの事を褒め危険性を伝えてみる。

「確かに・・・

あいつは此処に来るのも楽しみにしていたしな・・・
資料を見てシンクと騒いでたしな・・・

それにデュースとケイトの言つとおりだな・・・！
私たちもそろそろ行こう！」

セブンは立ち上るとデュースとケイトを連れ次なる場へと駆けて
いった

――魔導院前――

「やつやめてくれえ！
たつ！助けてくれえ！たのむつーなんでもする！朱雀の捕虜にでも
なんでもなるからつ！」

怯えきつている兵士、

仮面を付けていてもその恐怖感は仮面の中から溢れだしてきている

「今更か・・・？

100人全員が降参でも土下座でもしてくれたら許したかもしれない
えなあ・・・

でも都合が良すぎな気がするのは俺だけかな？

仲間が殺されるに殺されて最後に自分が残つて命じいか・・・？
君も朱雀の人を殺してきたんだろう・・・？
楽しかつたか・・・？

嬉しかつたか・・・？

他人を殺すのは喜んで自分が死ぬのは悲痛の叫びをあげるのか・・・
？

俺も死にたくはない・・・
だけどお前は死ね、お前も死ねと思い人を殺すんだな・・・
でも最後は俺が殺して天国にでも送つてやるよ・・・

そのかわり・・・ここで死んでくれ・・・
俺は貴方を覚えているから・・・

だから・・・最後は僕に十字架を背負わせてほいいっス・・・
「

男は銀髪の少年の話を聞くと少しいままでの事にでも疲れたのだろうか安堵の表情を浮かべた

男は恐怖を振り払い

「だつたら・・・

殺してくれ・・・もう疲れた・・・

私は疲れたよ・・・

最後に君のような人に殺されるのなら私の人生に華があつたとでも思いたいね・・・

男はそう言つと銀髪の少年が持つっていた懐刀を自分の腹に突き刺し血を流し、まるで殺された人間ではないような顔をして眠つた。

「さて・・・

そろそろ墜とすっス・・・

その前に！」

銀髪の少年は自らが殺した白虎兵の死体、魔導アーマー、鋼機の残骸の山に向かい一礼し祈りのようなものを手で現し捧げ掌を死体の山に向け一気に握るすると緑、赤、青、白、紫、といった発光するまるで火の玉の様な物体を掌に納めた

この火の玉の様な物体はオリエンス全域に存在する生物の魂で「ファンタトマ」といわれるこのファンタトマを先ほどの様な事を執り行いとある場所に送るこの様なことが出来るのはクラス〇の者達のみ

「こんなに殺したのか・・・
誰一人として忘れないっスからね・・・
そろそろ・・・墜とさないとみんなも困るし撃墜任務を始めるっス
よー！」

意気込むテンが右手を振り上げると右ポケットに入れていた通信機
がなり始めた

「「テン！大丈夫か！？」」

相手はセブンだつた心配していたのかもの凄く大きな声になつてい
る彼女は滅多に叫んだりする事はないのだがこの時のみはさすがに
自分の中のテンへの心配が有頂天になつたのだろう

「大丈夫っスよ～・・・
セブンさんに心配してもらえるのが嬉しいっス～・・・
今晚は祝勝会にするっスよー！
ジャンジャン料理するッス！さあ～！戦艦墜とすっスよー！
じゃあセブンさんは撃墜報告するっス～！」

テンの態度がいつもの態度に戻り内心ホッとするセブンしかしまだ
戦いは終わっていない

その場に居たデュースとケイトは交信内容を聞くと表情に笑顔が表
れた

その交信の5分後

「一艦撃墜っスー！
エース達のは2番艦っスね・・・
それ以外は墜とすっスよー！」

開戦、運命の3時間 2（後書き）

第一話です

少しひとんの出番を増やしてみました！

開戦、運命の3時間 3（前書き）

開戦から3時間、

テンは着々と敵艦を撃墜していく

テンは魔導院上空で九つの尾を持つ狐をはるか地に見る

交信から五分後

空から魔導院付近に鉄の塊が大量に降り注いだ

——朱雀の街北側——

「テンかなあ～

派手にやつてるね～」

金色の髪にオールバックの髪型をしたのんびりとした少年が声をあげた。

「派手だねえ～

ジャックもあれぐらいできる～？」

茶色の髪のおさげ髪の少女が自分の武器ひしきメイス地に付け杖のよみにして支えて立っている

「わかんないよ～

僕は刀だし～テンはシンクのメイスより大きくて重い大剣だよ～多分無理かなあ～」

ジャックと呼ばれる金髪の少年は少しのんびりして口調をしているそれに対しシンクと呼ばれる少女も同じような物腰と話し方だった

その話方とやりとりに少しだけイライラする男が一人、

「おー一人ともまだ戦いは終わってはいませんよ？」

それにもだ祝勝には早いですし我々にはまだ任務が残っていますし
それよりも早く魔導院全域にかけられてしまつてはいる皇国軍の開発
したジャマーというクリスタルの力を向こうかしてしまおぞまし
い兵器を破壊しなければなりません。」

金色の髪にこぢらは少し長めで髪の毛が目にかかるてしまつてはいる
少年は耳にタコができるほどシンクとジャックに注意を促した
その長く的確な注意をした少年に対しシンクはふてくされながら

「トレイ～そんなことは私とジャックもわかってるよ～
デュースの方がやりやすいよね～ジャック～」

「そうだね～トレイの注意とか説明はほとんど嫌味聞かされてるよ
うなもんだからね～」

目の前にいるトレイに対してもし不満を持つ二人

トレイは一人の発言をまるで聞いていなかつたように話を再び始めた

「それにまだエース達が来ていませんジャマーの解除まではまだ時
間がかかつててるのでしょうか・・・」のままでは我々に疲労が回
つてきますよ・・・

時間まで後5分

「私は大丈夫だよ～？

シンクちゃんはまだまだいけるよ～！
頑張っちゃうよお～！」

「僕も全然余裕だよ～？」

トレイはもう疲れたの～？」

「ヤーヤした顔をトレイに向けるシンクとジャックそれに対しトレイは一度咳ばらいをすると

手を口の近くに添え考え始めました。

トレイは瞬時に考えがまとめる

「その前に付近の敵を片付けるのを優先させましょう」

エース達とテンの心配はそれからです

では行きましょう」

トレイは自分の武器である刀を刃突すると付近の敵を殲滅しにシンクとジャックを誘導した

――朱雀の街南側――

「あ～！」

「ただけ沸いて出てきやがんだこつらはー！
どんだけ殺してもきりがないぞー？」

銀髪の少女がまるで狂戦士のごとく吠えている。

こちらの銀髪の少女はセブンとは違いかなり気性が荒く冷静さをなかなか保てないタイプだろう

それをいわせるのが彼女の無作為に束ねられた後ろ髪だろう

「サイズ・・・

少し静かにしるせりすれば心も落ち着くし敵も確実に倒せる・・・

「キングの言うとおりかもしれない
サイズは雑な所があるからな・・・
それにサイズが吠えることによつて人の視線がこちらに向けられる
こともある」

「キングの言つことはあつてるんだけど・・・
エイト！誰が雑だつて！？」

サイズの吠える声を聞いて注意を促した金髪で長身の男性はキング、あまりにもその風貌からは少年には見えないであらひ田つきと体格のよさがある

自分の武器である一丁拳銃も今は敵が居ないためしまわれている。キングの隣でサイズの田^だのことでの注意のようなものを促した短い茶髪の小柄な少年はエイト小柄な割りに攻撃への一撃には余念がなく敵には他のクラスの面々とは違ひ格闘という一人斬新な武器なのである。

「サイズが吠えるからまた敵が出てきたな・・・」

「サイズ・・・次は吠えるな面倒なことになる・・・」

「うるせえな！わかつたよ！もうほえねえからーつかほえた覚えなんてねえ！」

「魔晶石は設置した急いで出るぞ」

「……………どうせつねんだ」「うー。」

「それを知りませんでした・・・」

「ひさしだすが、とにかく田口を囲んで追いつく多分なんとかなる。

脱出口はどこにあるか入ってきたところから元の場へと戻るエース、
ナイン、クイーン、

しかし三人にはそれほどでは止めることはできない
エースは武器であるカードを投げ、

ナインは敵に一定の距離に近づくと敵をその槍で串刺しにし
クイーンは敵兵が気づけぬ速度でレイピアを敵兵に刺しこんでいく
順調に鋼機以外の敵を処理し終えた3人トドメを刺そうとしたその時
戦艦の甲板を突き破つて鋼機ごと3人の前を何かが消し去った
見覚えのある銀色の髪、そしてクラス〇の内もつとも重く長い武器
の大剣を扱う男が3人の前に現れた。

いたつス・・・

2番艦だけ残しておいたつスから早く脱出するつス～！」

テンはそういうと3人を大剣の能力を使い地面に大剣を突き刺しそこに3人とともに瞬間移動し着陸した。

「終わったのか？」

「終わったスよ？」

「1・3・4・5・6番艦まできちんと落としたつスから！」

自信満々に自分の功績を3人に報告するテンしかしナインだけは納得していなかつた

「んじゃその証拠をみせてみるヒリアー！」

証拠を見せると鋭い眼光でテンを睨み付けるナインするとテンはズボンのポケットから皇国軍からの戦利品の形態食料が大量にあふれ出てきた

「すごいですね・・・

ほんとにテンが偉業を達するなんて・・・」

驚きの表情を隠せないクイーンそれほどにまでテンのやつてのけた任務は困難かつ敵の量も尋常じやなかつたのである。

「ジャマーをひとつ取り除いたことにより一定のヒリアで魔法が使えるようになつたつス

それとみんなが闘技場で戦つてるつスから先に行つててほしこつスみんなの話によると2人の候補生を保護したらじつス！」

「わかつた！ テンも後できてくれ

そういうとエース達は闘技場の方角へ走つていつた。

「さてと僕は残党処理か・・・
う・・・疲れそうだ・・・」「

「テンはその日の任務の過酷さ愚痴をほき始めた
すると通信機に連絡が入った

「はい？ テンっスよ～？ もしも～し？」

「「私よ。 テン任務達成ご苦労様」」

「マザーに褒められるにが一番うれしいつス」

テンの通信機に交信してきたのはDrアレシアだった
アレシアは自分の子主の様にクラスのメンバーを愛している
特に今回の作戦はあまりの事がなければクラスのメンバーは生命
の指輪の力で死ぬことはない

しかしアレシアは個人的な任務や何をすればよいかを伝えることもある
あるその他には労を労う事もある

特にテンはアレシアの中では一目置いているほつだ愛情は同じよつ
にアレシアは注いでいるが個人の能力などで戦力差が出てしまう場
合などにはテンを起用したりしている

「「今のところこの連絡はテンにしかしていなは後にあの子達に
も伝えることになるのだけれどね」」

「なんスか？」

「「今日は1-2日だつたかしら？」

「4日には魔導院にあなたたちはお引越しよ」「

「一日後っスか？ それはまた急っスね・・・ども一日も休みなんス
か？」

何か忙しい用事とかもあるんすか?」

「『軍令部のお偉い人たちがあなた達の存在、といううか活躍を快く思つていらない人たちが居てね文句やどこから来たとかいちゃもんばかりつけてくるのよ』」

「マザーも大変っスね・・・

帰つてきたら肩たたきとかでもしてあげるっスあと暖かいご飯を作つてまつてるっス」

「あら、じゃあ久しぶりに頼もうかしら?

あと14日にはあなた達の生活する場が魔導院になるから、まあ私もあなた達の所に時折顔を出しに行くわ、それと荷物をまとめるこ

と」

「了解したっス。じゃあ僕はみんなのところに行つてくれるっス~」

そういうとトヨンはマザーとの交信をきり魔導院の闘技場へ向かつた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9465z/>

FINALFANTASY零式－10の名と4人のルシー

2011年12月30日23時50分発行